

氏名（本籍）	モリ 森	タ 田	タイ 太	シヨ 初	（東京都）
学位の種類	博士（美術）				
学位記番号	博美第164号				
学位授与年月日	平成18年3月24日				
学位論文等題目	〈作品〉産 卵 〈論文〉死生観に基づく立体表現				
論文等審査委員					
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	木戸	修
（論文第1副査）	〃	助教授	（ 〃 ）	布施	英利
（作品第1副査）	〃	教授	（ 〃 ）	手塚	登久夫
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	米林	雄一

（論文内容の要旨）

はじめに

「死ぬのが怖い」物心ついたときから常にそう思っていた。死はこの世に生まれた生きとし生けるものすべてに平等に与えられた永遠のテーマだろう。当然今の私にとっても最大の関心事であり、最大の謎である。なぜ死ななければならないのか、死ぬとは一体どういう事なのか、多くの人々を惹き付けてやまない「死」という事を自分なりに解釈し、それを作品として表現する事で「死」を見つめ直してみた。

第一部 死を考える

一章 眠るのが怖いという事

寝ている間の自覚意識の薄さを死の疑似体験と置き換え、自分の考える死のイメージを漠然と提示する、死イコール無のイメージ。死んでいないから死の恐怖はよくわからないが確実に地上から消えるという事だけはよくわかるという恐怖について論ず。

二章 宗教は救いになり得ないのか

死という恐怖を拭うために、死の恐怖を解決するのが一番の目的であろう宗教について考える。主に自分にとって身近な仏教とキリスト教を扱う、死後の世界の不明確さを提示。

三章 宇宙論的な「私の死」

自分が死ねば宇宙も死ぬ、そして二度と生き返らないということを宇宙の誕生から、そして消滅という事を交えながら論ず。

四章 祖母の死

カトリック信者だった祖母が去年他界した。今まで父母兄弟親戚に不幸が無かったため、はじめて血のつながった者の死を目の当たりにした。その時の自分の感情を思い出し、死の悲しさの理由を論ず。

五章 他人の死

テレビや新聞で知る人間の死、事件や事故戦争や最近の事ではスマトラ沖地震といった天災などで失われた命。自分とはほぼつながりの無い死がなぜ悲しく思えるのかを論ずる。またその中で人を殺して

はどうしていけないと言われているのかを歴史や生物学を交えて論ず。

第二部 作品をつくる

一章 彫刻である意味

生きる実感として創作するという事でまず自分の手で触れることが重要だという事、そして何故平面作品という表現方法ではないのか、平面作品は表現したい存在が枠の向こう側にしか無いものではないかと考察した。

二章 これまでの作品

これらの、死生観を基に今まで作ってきた作品（卒業制作や修了制作等）を、写真を交え解説しながら、死生観の変容とそれに伴う立体表現の変容について論ずる。またここでは宗教観において死の救いになり得ないと論じたはずの仏教が、作品の中に多く影響を与えられてきた理由を仏教の世界観を交えて考察した。

三章 提出作品について

- (1) 蝶の羽化をモチーフに2004年制作。イモ虫が蝶に変体するその劇的な変化＝生命の持つ強い力に「生」を見だし、「死」をよりはっきりと自分の中に感じようと考え、また蝶の羽化に人の死を重ね合わせもした。
- (2) 燃えた樹々から新芽が芽吹く生命力の強さを「生」の持つ力の強さに投影させ劇的に表現した作品について書く。
- (3) 何故トンボの産卵をモチーフとして選んだのか、「死」というテーマを今最も表現し易い理由と、昆虫のフォルムの持つ面白さの二つの点から論ず。

おわりに

彫刻は死の恐怖への救いになり得るのか、結論から言えばなるといえる、そしてならないともいえる。つまりどういう事かと言うと、私にとっては彫刻を行為として行う事こそが意味のあることであり、作品そのものの持つ意味は「つくる」といった事の結果物であるから、自分の作品は救いになり得る可能性は高いが他の作家のつくる作品はそうならないと言えるのだ。しかしこうも言える、ある人が私の作品を見る事で生や死について考えたりするならば、彫刻をするという行為を行わなくても救いになり得る可能性がある。つまり表現するという事に正しい答え等はありません。意味で非常に不安定な事なのだ。実は謎であるかの如き「死」というもの以外すべて不確実なものなのである。

不安定なものの代表とも言うべき「生」。2004年頃から作品のモチーフとして明らかに「死」から「生」へ転換していった。「生」は不安定な物ではあるが、今、自分がここに存在しているという事は曲げる事の出来ない絶対的なものであり確実なものである事から、「無」に向かって収束してゆくイメージのある「死」をモチーフにするより、「有」に向かって広がってゆく「生」をモチーフにする事で、自分の考え方や作品の持つ世界が広がってゆくと考え始めたからだ。

「死」と「生」は隣り合わせに存在する真逆の事ではあるが、隣り合わせであるが故に「生」を見つめる事が「死」を見つめる事でもある。作品を自己表現の手段として使うのであれば、まさに今ここに生きている私が、そこやあそこに生きている人々に自分の考えを伝えるのに「生」をモチーフにした作品を作るようになったのは、自然な事なのかもしれない。